横須賀市立中央図書館郷土資料室

緒明山 通信８

OAKIYAMA-TSUSHIN

異国船絵図（弘化３年）

発行日
令和３年（2021 年）６月 10 日

発行者
横須賀市立中央図書館郷土資料室
住所　神奈川県横須賀市上町 1-61
電話　046-822-2077

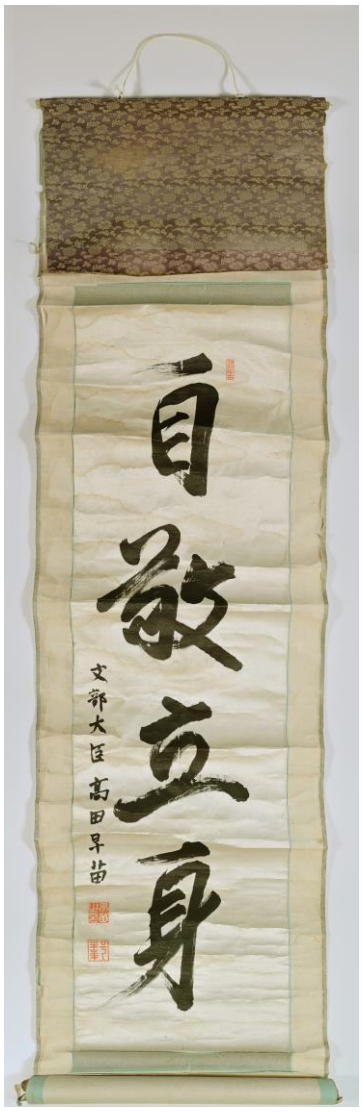
本誌は印刷発行していません。次の図書館あるいは市史編さん事業のホームページからダウンロードしてください。
https://www.yokosuka-lib.jp/contents/archive/
https://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/8150/shishi/shishi1-top.html

《 資料紹介① 》

前島密の新資料

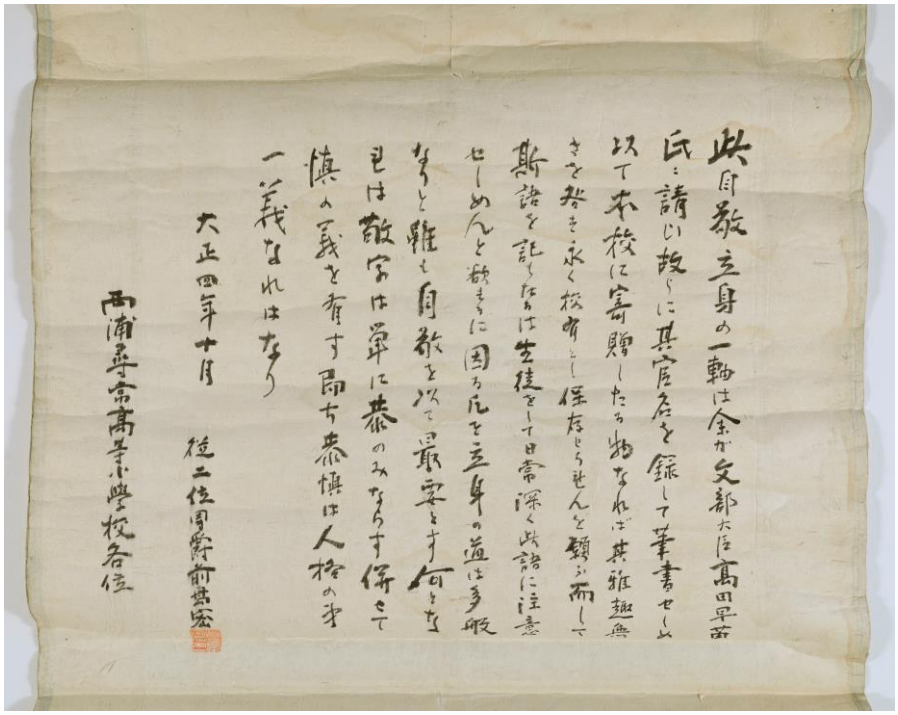
郷土資料室　谷合伸介

ミニ展示「中央図書館所蔵の絵図展」の展示資料の中から、昨年新たに見つかった前島密に関する資料について、ご紹介します（令和２年度寄贈）。



（左）掛軸表面

（下）掛軸裏面



前島密は、日本の郵便制度の創始者であったほか、電話、鉄道、海運、教育等の分野においても多大な業績を残した人物であったが、このたび、彼に関する新たな資料が見つかった。その資料とは、昨年郷土資料室が大楠小学校（旧西浦尋常高等小学校）から寄贈を受けた 93 点のうちの２点で、一つは文部大臣高田早苗による書の裏書、もう一つは「前嶋家寄贈書台帳」と記された書物の寄贈目録である。

まず、前者の裏書であるが、掛軸作成の経緯や「自敬立身」という言葉にこめた思いなどが、密本人によって綴られている。それによると、書は密が西浦尋常高等小学校に寄贈するために、当時文部大臣であった高田早苗に自ら依頼して書いてもらったもので末永く同校で保存してもらいたいこと、そして、身を立てる（立身）道は様々あるが、最も大切なことは、人を敬い慎む（自敬）心をもつことであると

説いている。

密は、明治 44 年（1911）から大正 8 年（1919）の間、芦名に設けた如々（じょじょ）山荘で晩年を過ごした。この山荘の近くに西浦尋常高等小学校があり、明治 45 年（1912）に同校が焼失した際は、密が支援したという話も伝えられていることから、彼がこの掛軸を同校に寄贈したとしても不思議ではない。

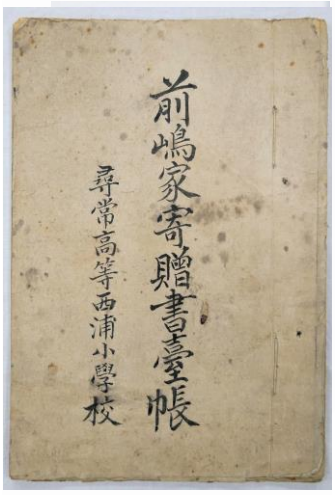
一方、髙田早苗とはどのような人物であろうか。密と髙田は、ともに東京専門学校（現早稲田大学）の創設に尽力した人物で、髙田は早稲田大学の初代学長（のちに総長も歴任）を務めた。また、髙田の妻は密の長女（不二子）であり、髙田は密の娘婿であった。そうしたことからも、当時、第 2 次大隈重信内閣の文部大臣であった髙田に書を依頼したものと推察される。

髙田の文部大臣就任期間は、大正 4 年 8 月 10 日から翌年 10 月 9 日までであり、密が「従二位」に叙されたのは大正 2 年（1913）8 月 20 日であること、密の「男爵」の爵位授与は、明治 35 年（1902）6 月 19 日であることから、掛軸に記された大正 4 年 10 月時点での役職や位階等について、不自然な点はみられない。

また、筆跡については、西浦村の村長であった辻井家に残されている明治 44 年 11 月 1 日付前島密書簡（辻井善彌「前島密の招待状」（『三浦半島の文化』23 号）の署名と比較すると、双方の筆跡は酷似しており、同一人物のものとみることができる。なお、髙田は「半峰」の号を称していたが、書には同じく「号半峯」の落款印が押されている。

以上、役職や位階、筆跡等に誤りはないとみられることから偽文書や贋作として作成された可能性は低く、さらに密と深い関わりがあった西浦尋常高等小学校にこの掛軸が残されていたことも踏まえれば、裏書は密直筆のものとみるのが妥当であろう。

2 点目の「前嶋家寄贈書台帳」は、大正 8 年 5 月付で前島家が 453 冊の書物と 154 冊の洋書、計 607 冊にのぼる書物を西浦尋常高等小学校に寄贈したことが記された目録である。密は大正 8 年 4 月 27 日、84 歳で没しているため、彼の死後、遺族が寄贈したものと思われる。実際、目録の始まりに「前嶋男爵寄贈書籍目録」との記載があることから、密が所有していた書物の寄贈であったことが裏付けられる。ただ、残念ながら、この時、寄贈された 607 冊にのぼる書物は現存していない。



先述のとおり、密は明治 45 年の火災の際には西浦尋常高等小学校への支援を行っていたほか、同校の卒業式に出席し生徒らに勉学の訓示を行ったという話も伝えられている。今回見つかった 2 点の資料は、そうした密と同校との関わりを資料的に裏付けるものであると同時に、密と地域とのつながりを具体的に窺い知ることができるものといえよう。

（参考文献）

辻井善彌　「前島密と横須賀」（『三浦半島の文化』26 号、2016 年）

>>> お知らせ <<<

令和 3 年 6 月 10 日から 7 月 18 日まで、中央図書館 1 階ロビーで、ここで紹介した資料を含むミニ展示「中央図書館所蔵の絵図展」を開催します。

ミニ展示「中央図書館所蔵の絵図展」～展示品一覧～

（パネル）

1　湊奥水地之内埋立目論見彩色絵図（複製）
2　相模国三浦郡大矢部村略絵図（複製）
3　慶應元年横須賀製鉄所設計地縄張図（複製）
4　横須賀製鉄所建設時の写真（慶応 3 年、明治元年）
5　異国船絵図（複製）
6　海陸御固泰平鑑（複製）

（展示ケース）

7　掛軸（髙田早苗書・前島密裏書）（複製）
8　前嶋家寄贈書台帳
9　横須賀港一覧絵図
10　横須賀港一覧絵図銅板
11　横須賀明細一覧図（複製）
12　「ヨコスカ製鉄所」刻印煉瓦
13　佐波一郎造船学ノート
14　横須賀製鉄所（造船所）黌舎の写真

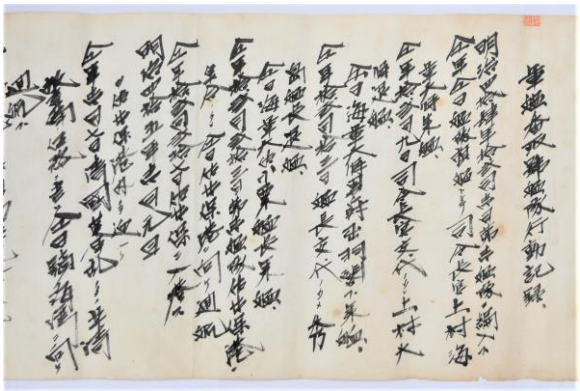
《 資料紹介② 》

横須賀軍港内軍艦香取短艇衝突沈没事故

郷土資料室　谷合伸介

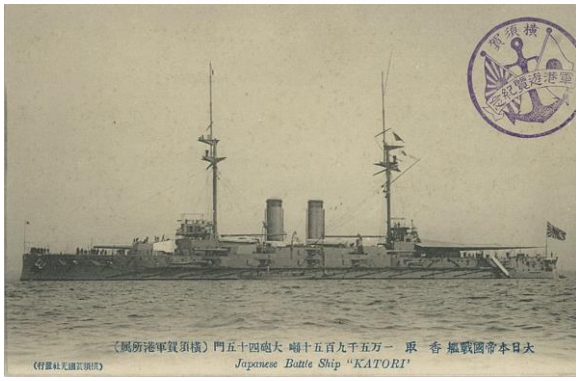
昨年、郷土資料室が撮影を行った資料の１つに「軍艦香取号艦隊行動記録」がある。今回は、所蔵者のご了解を得て、この資料を紹介する。本資料は、元々所蔵者の祖父が所有していたものであったが、入手に至る詳しい経緯は不明である。ただ、資料の上段には割印が据えられ、明治 44 年（1911）12 月から大正元年（1912）11 月までの戦艦香取の寄港地及び各地で行った訓練の内容などが時系列で克明に記されている他、明治天皇の崩御や大正天皇即位時の香取の行動も具体的に記されていることから、本資料は香取の関係者が書き記した資料とみられる。香取は、明治 44 年 8 月、皇太子（後の大正天皇）北海道行幸の際、その御召艦の任務を担った他、大正 2 年（1913）11 月 10 日、東京湾で観艦式が行われた際も、大正天皇の御召艦となっている。

〈「軍艦香取号艦隊行動記録」の冒頭部分〉



（個人蔵）

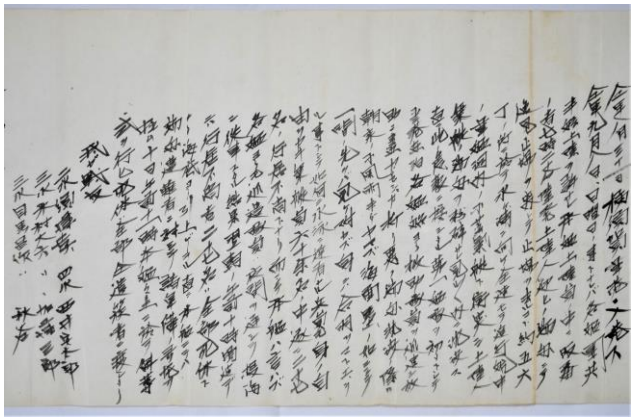
〈軍艦香取の絵葉書〉



（横須賀市立中央図書館郷土資料室蔵）

さて、「軍艦香取号艦隊行動記録」（以下「行動記録」と略す）には、とりわけ詳細に内容が記されている箇所がある。それは大正元年 9 月 8 日の横須賀軍港における記述である。この日は、香取の短艇（小型ボート。陸地への兵員の輸送や物資の運搬などに使用。）と戦艦河内の小蒸気艇が横須賀軍港内鳶ヶ鼻付近で衝突事故を起こし、香取の短艇に乗っていた兵員が海中に投げ出され遭難し、27 名が溺死するという大変痛ましい事故が起きた日であった。この事故の一方の当事者であった香取側の関係資料に、その記録が残されていることは大変興味深い。当時、この事故を報道した『横浜貿易新報』の記事と合わせて振り返ってみたい。

〈9 月 8 日の事故を記した箇所「行動記録」〉

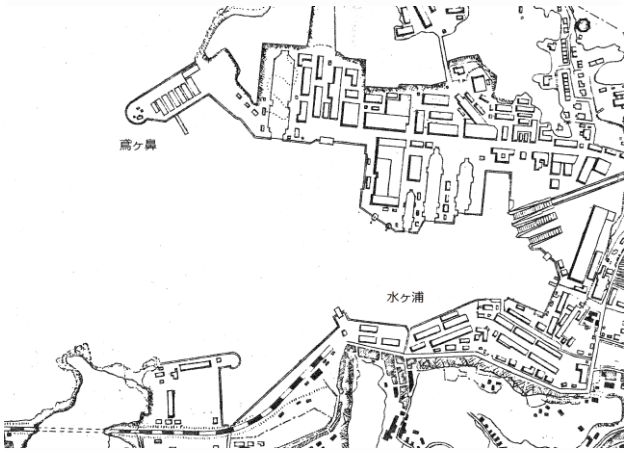


（個人蔵）

大正元年 8 月 30 日、鳥羽港沖で戦闘射撃予行演習を行った香取は、翌 31 日横須賀に入港した。

9 月 8 日、日曜日で上陸が許可されていた香取の兵員の一部は、20 時までに同艦に帰艦するため、逸見埠頭から 19 時 20 分発の短艇に乗り、風雨のなか出発した。途中、鳶ヶ鼻見張所付近の海上に差し掛かった際、風雨が激しくなり短艇の突端にあった灯火が点かなくなってしまう。同じ頃、河内艦載の小蒸気艇は、水ヶ浦に向け航行していた。鳶ヶ鼻付近で、小蒸気艇は、風浪の激しさと向かってきた短艇が無灯であったために、衝突回避することができず、短艇の船首を粉砕した。その後、短艇は沈没し、乗艇員も海に投げ出された。この日は相当な悪天候だったようで、他にも石炭を運搬していた民間の帆船が風浪の影響により、米ヶ浜沖合の浅瀬に乗り揚げ、船底を損傷し沈没する事故を起こしている。

〈明治 40 年前後の横須賀軍港〉



（「横須賀軍港沿革概覧図其三」を一部修正し作成）

事故を起こした河内小蒸気艇の兵員は、直ちに非常信号の汽笛を鳴らし、救助に着手した。また、事故を知った見張所は、海軍港務部に急報し、直ちに停泊していた各艦に通報した。各艦ともに探海灯を照らすとともに、第 1 艦隊から 12 隻、第 2 艦隊から 6 隻、横須賀予備艦隊から 6 隻、水雷戦隊より 50 隻の短艇を出動させ、救助活動を行った。結果、香取短艇の乗艇員の半数以上を救助することができたが、27 名は見つからず、深夜まで救助活動が行われた。しかし、日付が変わった 9 日深夜 0 時半になっても、行方不明者を発見することができず、やむなく捜索を一時中断した。一方、救助された乗艇員は直ちに香取に帰艦し、そこで応急手当を受けたが、いずれも命に別条はなかった。

早朝 4 時、香取と同じ第 1 艦隊の伊吹、利根、安芸、朝日、八雲から各 10 数名の潜水夫が捜索に着手した結果、9 時 25 分までに 26 名の兵員の遺体を鳶ヶ鼻付近の海底で発見した。しかし、残り 1 名の行方は分からず、引き続き捜索活動が行われ、午後になってようやく米が浜の見張所付近の海底から 1 名の遺体が見つかった。27 名の遺体は、香取に収容され、白木の棺に納められた。棺は、艦友らが、市内で松板を買い求め涙ながら製作したものだった。葬儀は、10 日午前 11 時から香取の艦上で行われた。12 時半、乗組員一同敬礼の中、27 名の棺は短艇で逸見埠頭に運ばれた。棺は砲車に移され、13 時半、鎮守府長官以下各艦隊の兵員等をはじめとした一団が、風雨のなか、海軍工廠西門を出発し、田戸の聖徳寺に向かった。この一団は、10 丁（約 1.1km）の行列となり、約 2,000 人に及んだという。15 時、聖徳寺に到着し、本堂で約 10 名の僧侶によって、仏葬が行われ、16 時、棺はそれぞれの遺族のもとに引き渡された。

以上が、香取側の資料である「行動記録」と当時の新聞（『横浜貿易新報』）記事を基にした事故の経過である。双方の事実関係の記述は、概ね一致しており、大きな差異はみられなかったが、細かい点では、2 点ほど異なる記載もみられた。1 点目は、香取短艇に乗艇していた人数で、『横浜貿易新報』は 55 名と伝えるが、「行動記録」は 60 余名と記載している点、2 点目は、最後まで行方不明となっていた 1 名について、『横浜貿易新報』は 9 日の午後になって見つかったとするが、「行動記録」には同日 10 時までには 27 名全員が遺体となって引き上げられたと記している点で若干の差異が認められた。

9 月 11 日、事故発生から 3 日後であったが、香取は明治天皇大葬での「弔礼砲」の任務にあたるため、横須賀を出港し品川港に向かった。しかし、この事故で艦友を失った香取兵員の悲しみは深く、一周忌を迎えた大正 2 年 9 月 8 日、兵員一同は、聖徳寺に「軍艦香取短艇遭難者之碑」を建立し、艦友の慰霊を行ったのである。この碑は、現在も同寺に残されている。

（参考文献）

『横浜貿易新報』大正元年 9 月 9 日、同 10 日、同 11 日

あとがき

今号では、昨年収集した資料の中から、2 件の資料を紹介しました。前島密は、晩年の約 8 年間、芦名の地で過ごしましたが、横須賀に現存する密の資料はごく僅かであり、新資料は、密と横須賀とを結びつける貴重な郷土資料の発見といえます。また、2 件目に紹介した大正元年の沈没事故では、横須賀軍港内で 27 名の兵員が命を落としました。この事故の 20 年程前にも軍艦扶桑の兵員が、風浪が激しかった夜間に逸見埠頭から出航、本艦横まで辿り着いたものの転覆し 30 数名が亡くなるという惨事があったことを当時の新聞は伝えています。ヴェルニー公園の眼前に広がるかつての横須賀軍港には、こうした痛ましい事故の歴史がありました。地域の歴史の 1 つとして、忘れることなく残していきたい記憶です。